
淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

酒呑シゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

【Zコード】

Z5619Y

【作者名】

酒呑シゲ

【あらすじ】

淫魔。すなわち人の精を糧とする淫の悪魔。
しかし、何事にも例外はある。

淫乱ではない淑女な淫魔エリザベス。

彼女の苦悩は、先駆者に似た物である。

こんばんは。毎度お馴染み『淫魔』です。今日は皆さんに少し話したいことがありますて、この場をお借りさせていただきました。我々『淫魔』という種族は、人間の精を絞りつくし、それを糧とする悪魔と世間では評されていますね。現代においても、その風評は変わりありません。そのことです。そのことについて私は話したいのです。

私は『淫魔』としてこの世に生を受け、78年の若輩者であります。しかし、私はいまだに人間の男性に対して、その……何と言えばよいのでしょうか。夜に男性のいる部屋に忍び込む。つまり夜這にして襲う……性的な意味で取つて頂いて構いません。

とにかく、私はそういう行為をしたこと�이ありません。

というか『淫魔』という種族なだけで、魔界を歩いている私に色目を使つたり、蔑むような視線で見られるのは、正直心が痛みます。私も女です。容姿に関しては『淫魔』という種族の特性からか……自分で言つるのはお恥ずかしいのですが、客観的に見れば見目麗しいものだと思います。そのせいか前述したようなお方が、多くお紹介をお掛けになられます。時代は変わります。淫魔も変わります。淫魔たちが全て私のような考え方を持つてゐるわけではありません。私とは真逆の性格で快樂主義者である方もいますし、むしろそちらが多数です。

ですが、私は違います。種族の特性のせいです、時には発情したりもします。ですが、そんな時も私は己を見失いません。

その結果、私はいまだに純潔を死守しています。殿方とお付き合いたいことも一切ありません。ですが私は、自分自身に誇りを持つ

ています、胸を張れます。

だからマジで私の事を淫乱な悪魔だとか、はしたない女だとか、それに準ずる見方をしたいでください、マジで。マジを一回使いましたよ。これがどういう意味かわかりますか？

そう、とても重要なんです。

申し訳ありません。少々熱くなってしまった。だって女の子だもん。失礼、涙は出でていませんでした。

とにかく私は、淫魔の不当な扱いに反対します。時代は変わったんですね。

あ、自己紹介が遅れましたね。エリザベス・ラトウプーティンと申します。

O ラン・バーピング(後書き)

ちよつと前に書いたやつです。

単発なので、更新はしないかなーと思います。

もし需要率が高ければ更新するかもですwww

就職決定！（前書き）

感想を頂いたので、続きを書かせていただきました。
何分、プロジェクトなども作っていないので至らぬ点もあるかも知
れません。

どうか生暖かい目でスルーまたは『いいはいっだろー・シゲのハゲ！』
と書いてもらつたら踊ります！

就職決定！

エリザベスは今日も魔界の街を歩く。他の淫魔たちのように、周囲の悪魔たちを誘惑するように、腰を基点にした淫猥な歩き方ではない。軸のぶれない、凜とした歩調である。

一風変わった淫魔に悪魔たちは奇異の視線を向ける。男を引き寄せるフェロモンを周囲に放つてもいなし、桜色の柔肌を露出させるような服も着てもいない。彼女の視線、歩調、身なり、全てが淫魔とはかけ離れていた。

彼女が淫魔であることが分かるのは、剣先のように尖った耳、背中から生えた黒翼。N.O. Life Kingの血族を示す紅色の瞳、そしてその内に煌々と輝く高貴さ。整った容姿。姿形は淫魔そのものであったが、その行動や格好は『淫魔』とは大きくかけ離れたものだった。

ギャップ……それに限るだろう、彼女が他の淫魔よりも男悪魔に言い寄られる理由は、彼女にとつてそれは迷惑極まりないものである。

『どうせ淫魔なんだし、そんな身なりしてても誘つてるだけなんだろう？』

こんな事を言われた日には、ぶん殴つてやりたいと思つのも仕方が無いだろう。

だがしかし。淫魔エリザベスにとつては、それらが日常茶飯事なのだが。

鮮血のように紅い瞳。腰まで届く桃色の髪。身長は他の淫魔に比べると低めの150cmと少し。

これが客観的に見た私の容姿です。

種族の特性故に、どう靈廟目に見ても万人が振り向く美貌なんでしょう。顔も他の淫魔と違つて、幼い印象を受けるかも知れません。ようは童顔というやつでしょうか。人間の歳で言うなら16、17歳くらいです、身長のせいで、まだ低く見えるかもしません。対して他の淫魔は20歳半ばと、妖艶なまめかしさを感じる見た目です。

淫魔に生まれたことを後悔しているわけでも、卑下するわけでもありません。ですが、しつかりと『淑女』らしさをモットーとする私としては、辛いと思つこともあります。

前置きが長くなりましたが。どうも、淫魔のエリザベスでございます。愚痴ばかりしていて、ストレスでしわが出来ないかが不安になる今日この頃です。

今、私は街を歩いています。目的はある建物に行くことです。

『職業安定所』みたいなもので、魔界の住人達のそれぞれの種族あつた職業を紹介してくれたりする場所です。先日まで、私はバイトでレストランのウェイトレスをやっていました。だけど、接客中にあまりにもセクハラ紛いな事をされるので、今朝方店長に辞表をお渡ししてきたのです。

働くがざる者食うべからず。

ということで、仕事を探しに行くのです。そもそも一人暮らしなので、お金が無いと路頭に迷うことになってしまふのですが。

余談ですが、『淫魔』には親家族と言つた概念がありません。初

代魔王の眷属である我々『淫魔』は、自然に生まれるのです。そう、それはもうポンッと。生まれた時には、既に自我というものがおり、自身を認識しています。

他の悪魔、魔物は生殖行為によって繁殖するものが多いのですが、『淫魔』は悪魔や魔物とは規格外なのです。

生殖目的じゃ無いなら、なぜ『淫魔』が人間の精を求めるのかと、いうと、それは自らの欲望に従つてるだけでしょう。私は違います、そんなことしませんよ？

更に余談ですが、『淫魔』が子を宿せないというわけではあります。

閑話休題。

「ほんにちはー。」

やたらと豪華な外装内装をした『職業安定所』……別名『悪魔協会』に入った私の第一声でした。挨拶は大切です。第一印象が相手とのこれから関係を左右するともいいますから。

私は挨拶を済ますと、受付のお姉さんの元へ慣れた足取りで向かいます。

「またセクハラですか？」

「はい……」

「まあ、気を落とさずに……良い仕事見付かるといいわね、手伝いますよ」

初対面ではありませんでした。この人は受付のお姉さんこと吸血鬼の『ツェペルさん』。肩くらいまでのセミロングヘアで、瞳の色は私と同じ紅色です。まあ、私よりも少し薄いですが。

理由は、ツェペルさんが吸血鬼だからです。吸血鬼も初代魔王の眷属で、私と気が合うのもそれが理由かも知れません。本来高貴で、魔界でも貴族が殆どの吸血鬼が何故こんな場所で働いているのかといふと、勘当されたらしいです。

親に政略結婚の種にされるのが嫌だったそうです。半ば家出の形だつたと聞くので、実際は勘当されていないのかもしません。

「ありがとうございますー、ツェペルさんー」

「気にしないで……少し気持ちもわかるわ」

そう言つて、優しく微笑みながら私の頭を撫でてくれるツェペルさん。敬愛させていただきます姉様。

「今日は、エリーに良さそうな仕事もあるわよ?」「本当ですか?...」

エリーというのは私の愛称みたいなものです。

「ええ、そろそろ来る頃と思ってキープしてるわ

「うう……ありがとうツェペル姉様……」

「誰が姉様だ。はい、これ」

ツェペルさんの優しさにむせび泣く私に、一枚の紙を見せてくれる。なになに……?

「『人間界視察』?」

「ええ、簡単に言えば……人間界に言つて、各国の戦力を含む情勢、政権、財政、経済など、諸々の記録をまとめる仕事よ。本来はエリート悪魔じやないと出来ないんだけど、私が推薦状を書けばイケるだろうと思つわ、どうする？」

「各国つて、結構忙しいのでは……？ 私なんかに務まるでしょうか……？」

つい不安になってしまいます。というか推薦状つて、やっぱりツエペルさんつてすごい貴族なのでしょうか。

「あー、『めんね。各国つてのは語弊ね。一人につき一国。それに記録つて言つても、国内部に忍び込んで捕まつたら、それこそ元も子もない。だから、自分の感じるように書けば大丈夫。それにエリーツてすぐ仕事変わるけど、有能だしね？』

説明を付け加えるツエペルさん。

「なるほど……」

そう言われると少々悩みます。ツエペルさんがこのお仕事を紹介してくれたのは、きっと人間界なら私を淫魔と知る者が居ないから。容姿から注目されることはあっても、今のようにセクハラ、時たまある実力を以つてしたセクハラからも解放される……。

となると、後の問題は……。

「現地でのお金なんかはどうなるんでしょうか？」

「支給されるわ。でも最低限で家賃に食費、後は少しの行動費くらいね」

「お給料などの支払いは、魔界の貨幣でしょうか？」

「それは指定ね。人間界……国ごとの貨幣での支払いも出来るし、

私たちの国でのオッケー。あ、言つとくけど、給料はかなり良いわよ？一応国の仕事だからね

「……やります！ やらせてください！」

「そう言つと思つた。じゃあ、登録用の書類持つて来るから待つてね？」

私にそう告げると、カウンターの奥へと下がつていった。良い仕事を見つけました。人間界にも、前々から興味はありましたし、良い機会ですね。

同じ淫魔の人達からは嫌われるし、友達とかはツェペルさん以外には居ない……何も思い残すことはないです！ あれどうしてでしょう、涙腺からソルトウォーターが……

「何泣いてるあなた？」

「いえ、何でもないですよ……！ ただ、自分の友人関係と『ミニユ二ケーション能力に一抹の不安を抱いていただけです……ふふつ』

「……まあいい。はい、これの必須項目に記入お願ひ。期間は6ヶ月からで、以降は希望で延長できるわ。面接はあるはずだけど、わたしの推薦状あるし無しだと思つ」

サラシと言つて除けるけど、やつぱりすごい人です。名前、生年月日、現住所、種族、家柄。必須項目を一通り書き終えると、紙をツェペルさんに渡す。

「はい、確かに確認しました。人間界への出発は三日後になりますので、当日の朝9時に『第一層のポータル』にて集合です。場所は解りますか？」

やはり最後はいつも営業用の口調に戻ります。本人曰く、しつかりするところはするらしくです。

「はい、大丈夫です」

「ん、じゃあ今度こそ頑張ってねー。」

「はー……本当に今までありがとうございました……」

今まで「迷惑ばかりかけて、感謝しても感謝仕切れません。

「な、なに辛氣臭い顔してるのー。別に今生の別れってわけでも無いでしょー。ほら、私の魔電番号……何か困つたら連絡しなさい」

赤くした顔を隠すようにそっぽを向いて、私に魔電番号（自分の魔力を利用した通信技術）が書かれた紙を渡してくれるツヨペルさん。

「ううつ……ツヨペル姉さあああん……！」

「うわ、なにマジ泣きしてるのっー。」

「だつてえ。い、今まで人と交換したことなんか無かつたんですけど……わああん……！」

泣きそうになっていたのに、思わず声を出して泣き出しちしました。

「ああもうー。分かつたから……！」

「す、すいません……じゃあ、また寂しくなつたら電話します……」

「寂しくなつたらつて……」

や、やつぱり駄目ですよね……用事も無いのに電話したら迷惑なだけですよね。それに、私なんかから電話が来たら……きっと……

「あー……勤務中以外の夜なら電話しなきよ。ち、ちよつとくら

いなら付き合つてあげるわよ……」「

また顔を赤らめて言うシエペルさん。やつぱり優しい方です……
こんな私にも優しく接してくれるなんて。

「あつがどい」やこます……。 あつがと

「べ、別にエリーのためじやないってば！ 暇潰しついでよ、じやなかつたらエリーなんかと

そう、ですよね……やつぱり私なんて

「くうひい……つて言つのは冗談でー！ほ、本当はエリーと話したいなーー。」

「ほ、本当ですか！」

「ほ、本当本当ッ！…………何なのこの可愛い生物は…………舐めたいのに舐めたら罪悪感が…………これが、これが妹を持つ姉の気持ち…………」「え、え、何ですか？！」

なにかボソッと言つたツエペルさん。何て言つたのか聞き取れなかつたですが、何だつたのでしょうか。

「な、何でもないわよ。ほら、準備とかあるでしょ？　もう帰つて準備しなさい！」

「は、はー！ それでは、本当にありがとうございました。」

腰を折つて丁寧にお礼をして、出口へと向かう。最後に振り返ると、ツェペルさんが手を降つてくれていました。なので、それに笑つて返すと、何故か顔を赤らめてそっぽを向いてしました。

？」

ともかく、お仕事が決まったことですし、今日は家に帰つて準備をしないといけませんね。

うー、頑張るぞ！

就職決定！（後書き）

評価、感想はシゲの原動力となっています。

別連載の『今宵も一献 八百万屋朱顛』も、よろしければ是非是非
ご覧ください！

天罰？

「どうも、淫魔のエリザベスです。今日は人間界へ行く日で、昨日の夜から楽しみで仕方ありません。もうストレスでしわの発生を心配していた自分なんてどこにも居ません。

朝9時に『第一ポータル』前に集合とのことなので、今は歩いて向かっている所です。

『ポータル』というのは魔界における転送手段の一つです。魔界にある第一から第八十八までの『ポータル』は相互移動が可能で、人間界にも『中継ポータル』と呼ばれる、『ポータル』の子機のようなものが存在します。今回のお仕事では、『第一ポータル』から人間界の子機ポータルへと飛び、視察対象の国に予め用意されている家に向かうのが、最初の目的となります。

「こんにちは！」

「ん、ああ……君がツェペルが紹介してくれた子かい？」

「は、はい……よろしくお願ひします！」

ポータルの前で黙々と準備をしていたのは、一見すると人と変わらない姿の渋いおじさんでした。一般的に完全な人型に変化できる悪魔は、高位の存在か、強い魔力を持っている実力者の方です。おそらく、彼もそれに当てはまるのでしょうか。あごに蓄えた銀色のお髭と、鋭い目がこれまた恰好いいです。高い背丈なので、思わず気圧されました。

「まあ、時間もないしパッパと行くか。事前に資料は読んできているな？」

「はい、大方把握しました！」

五回読み直しました。

「よし、じゃあ転送するが……ちょっと待った、お前は人型にはなれないのか？」

「あ、申し訳ありません……」

つい緊張して忘れていました。背中の羽をしまい、尖った耳を人間のように丸みをもたせる。

「うむ、出来ないなら不味いことになつたぞ。瞳の色は変えられないと？」

「あ、田の色は出来ないんです……色を薄める程度ならば出来るんですけど……」

「ま、無理ならいいや、そこまで気にすることでもない」

瞳の色に関しては、魔王の眷族であるとの強い現れなのです。薄めることは出来ても、別の色にすることは出来ないです。

おじさんは素っ気なく会話を打ち切ると、背後のポータル（形状は球体で、直径1mほど）をいじり始める。

「人間界は初めてなんだつたな……」

「あ、はい！」

「……向こうでは、悪魔と思われる様な言動は慎むようにしろ。それにお前は淫魔だらう？ 悪ければ金持ち貴族の慰み物にされる可能性もある。淫魔との『行為』は、まさに天にも昇るような快感と聞くしな……どうした、顔を青くしたり赤くしたり？」

「い、いえ……緊張しているだけです。」忠告ありがとうござります

『ん、まあ頑張れ』と言つと、またポータルを操作する作業に戻つた。どうやら素つ氣ないのではなく、これがおじさんの素のようです。

「忠告は痛み入るのですが、楽しみよりも緊張の度合いが大きくなつてしましました。慰み物というのはつまり、人間の性の捌け口にされということですね……そんな歪んだ形で、今まで守り抜いた純潔を散らすなんて、死んでも嫌です。これまで通り、淫魔とは思われないよう毅然とした態度で挑むことにしましょう。

「よし。準備が出来た、この魔法陣の中心部に立て」

私はおじさんの言われるがままに、地面で青く薄光する魔法陣の中心に立りました。

「もう一度確認だ。転送される先は森の中だ。

お前が視察する国の場所は、予め渡した資料の中に書かれていたはずだ。国の内部には、この通行証を渡せば入国出来る

そう言って、私の顔写真が印刷された通行証を差し出すおじさん。年齢は16歳になつっていました。

「それでは、健闘を祈る……！」

どうも、淫魔のエリザベスです。

今、私は転送魔法によつて、移送空間の中で優雅な旅行気分で漂っています。移送空間と言つても移動している感覚は無く、暖かい粘膜に包まれている感覚だけがあります。周囲はまつ白い空間で、遠近の認識は難しいです、といつかわかりません。到着が近ければ分かるとのことなので、気長に待つことにします。

「およ……？」

どうやら、待つ時間もそう長くなさそうです。辺りの白色に灰色が混ざりはじめています。これが到着の合図とすることなのでしょう。空間にノイズのようなものが走つたりして、少し氣味が悪いですぐ……

ピシピシと空間にヒビが入り始め、ヒビから光が差し込み始め……パリンと、小さな破裂音が響く。

「え……」

暖かい粘膜の庇護が、突如として消えた。今は凍てつくような風が私の肌を刺している。

冷氣と強烈な浮遊感に、思わず閉じていた目を開く。

「な、な……どうして空に?！」

腐つても行為の悪魔、いや腐つてませんしただの比喩です。咄嗟に重力操作の魔法を自身に掛ける、浮遊魔法にしようとも思いましたが、浮遊している私が人間に見られる危険性を考えると、恐くてできませんでした。

そして、その選択は間違いになるのですが。

「さやあ……！」

重力魔法で落下速度が低下していた体が、背の高い木に突っ込んでしまう。完全に失態です、咄嗟の判断で注意が散漫になつていました。

無論。太い木の枝や、剣のように細い枝に体を打たれ刺される。

「う……が……」

体中に打ち身や裂傷が走る。人の姿で、身にまとう魔力も人間並みにしていたせいで、傷が次々に出来る。

痛みのせいで、既に魔法は中断されている。

そして突如、一層強い衝撃が、私の細身に響き渡る。

「つづからだが……」

動かない。鈍痛と鋭い痛みが交互に、そして小刻みに到来する。少しきつい、かなりきついです。

治癒の魔法を唱えようにも、痛みで集中も出来ないですし、それ以前に体が動きません。

段々と意識が朦朧とし、仰向けになつた私を焼こうとする太陽が目に入る。

「眩し、いですよ……太陽さん……」

やつぱり、私たちのような闇の隠れ人は太陽に嫌われているのでしょうか……そもそも、どうしてこんなことに……？

『ポータル』の指定ミス？いや、子機の元に転送されたのだから、それは無いはずです。きっと、何かのバグでしょう、先程の移送空間でもノイズが走つたりと、色々と可笑しい点も見られましたし。

きっと、バチが当たったんでしょう。こんな良い仕事に尻尾を振つて食らいついたから。そんなふしだらで非淑女な行為をしたこのバチがあたつたんですね。

「はは……痛い、な……」

そろそろ、本格的に意識の灯が搔き消えそうです。
私を照らしていた太陽も消えて、木陰に移動したような感覚します。

あれ……どうしてでしょう、仰向けだつたはずなのに、何かにもたれているような感じがします。

「大丈夫か……？　おい……意識はあるか……？！」

イケないイケない……とうとう幻聴と幻覚まで……目の前に霞んだ人間の姿が見えます……
寝ましょう、疲れました。
きっと、このまま眠つたら……いつも通りに……

天罰？（後書き）

短いですが、更新です。
面白いなー。と思ったら、ご感想やお気に入り登録してもらえたると、
励みになります！

最初の出発 (前書き)

連日更新頑張りますよーい。

最初の出会い

「う、うん……」

体の節々が痛い。四肢に力を入れども、全く動こうともしない。まるで自分の体じや無いみたいで。

「……何処でしおつ？」

今現在、私は仰向けになつていてる。ただし視界に入るのは、気を失う前に見た太陽さんではなく木目の天井です。どうやらここは室内のようです。そして私はベッドに仰向けでいます。そして

「ふ、服を着ていない……？！」

いえ、正確には上にシャツを着ています。はい、『上』には。下半身には履いていたスカートはあるか、下着すら穿いていない。ここから導かれる答えは……

「け、汚された……78年間守ってきた私の誇りが……」

駄目です、冷静になりましょつ。それらしき『痛み』は感じません！ きっと大丈夫です、信じるのです。自分を。でも、ならここは何処なのでしょう？

「あ、私の服と鞄が……」

体の中で唯一動く首を動かした私の目に入ったのは、机の上で綺麗に置まれている、私の服と鞄でした。だけど鞄は無事ですが、服

は所々ほつれて穴だらけ、見る影もありません。

「そうでした……転送に失敗して、樹に突っ込んでしまったんですね、ああなつてしまふのも当たり前ですね。でも、あれだけボロボロだと、もう着れないでしょうね……」

気に入っていた服でしたのに、残念です。いえ、今重要なのはそこではありませんね、ここが何処なのか、ということです。私が思考を巡らしていると『ガチャ』と、扉が開いた音が部屋に響いた。

「目が覚めた？」
「え……？」

首の稼動域の限界に挑み、音の方へ視線を向けると、男性が立っていた。見た目180?はありそうな男性です。

「あ、あなたは……？」
「そんなに警戒しないでくれ。何もしてない、服の着替えも女性にやらせた」

私の未知の者に恐怖する視線に気付いたのか、男性は手を上に上げて、私の気を楽にさせる言葉を放つ。男性への警戒は怠らずに、状況を見る。

男性の口ぶりから、ここは彼の家。部屋の広さや、高価そうな装飾品から見るに、財力のある人間なのかもしれない。男性の見た目は、癖つ毛のある耳くらいまでのショートヘア。髪と同じ、金色の瞳。そして中々に整つた顔。甘い言葉でも囁けば、なんぞイチ口つて顔しやがってます。

言つときますが、私はそんなことでなびきませんよー！

「俺はレイライト。レイライト＝リライブル。大層な名前だろ？？」

「レイと呼んでくれればいい」

「……エリザベスと言います」

気安く自己紹介を始めるレイという青年。顔には親しげな笑みを浮かべていますが、油断は禁物です。しかし名乗られたからには、こちらも返さねばなりません。礼儀は大切です。

「そうか、よろしくエリザベス。いきなりでなんだが、お前『悪魔』だろ？」

「…………う、え？」

「隠すな。その鮮血の深紅の瞳……人型に変化しているようだが……な？」

穏和な笑みを浮かべていたレイ青年の表情が、途端に猛禽類を思わせる獰猛な笑みに変わる。ポータルのおじさんの言っていた意味が分かりました。人間にとつて悪魔とは、魔王に属する軍勢の一員。つまり人間界では私は敵なんだ。

「ど、うして……？」

「確かに、一般人では分からないだろう。ただ、俺はその手の気配には聴いんでな……？」

答える悪魔よ、何が目的で人間の住む地へ降り立つた？

「それは、言えません……」

同じ種族には嫌われ迫害され、魔物や悪魔には『淫魔』というだけで言い寄られ……それでも、自分の故郷や友達ジョンベルさんが傷付くのに協力するなんて出来ません。

「言えません……！ 幸い私は動けません……姿も人型ですから、殺すのは赤子の手を捻るよりも簡単でしょう。どちらにしろ、口を割るつもりはありません！」

仰向けのまま、レイに出来る限りの強がりを視線に込めて言い放つた。

「……ふむ、意外だな」

しかしレイは、それに気圧された風もなく、意外そうに私を眺めた。

「お前は淫魔だらう？ てっきり、俺を誘惑でもして逃げる算段を立てていると思ったがな？」

「そ、そんな節操の無いことをするわけがないでしょ！ 私がそんなにふしだらな女に見えますか？！」

「え……ああ、すま……ん？」

失礼なことに上ないです。思わず叫んでしまいました。

「淫魔というだけで、そんな田で見られるのが嫌でこりに来たのに、結局変わりないのでですね……」

「お前、Hリザベスと言ったか……淫魔ではないのか？」

「体の一片、心の一欠けらまで、余すことなく淫魔です。ただし、そこいらにいる尻の軽い淫魔とは一緒にしないでもらいたいです！」

ああ、思えばこの7・8年間、苦心し続ける人生でした。ツェペルさん、一度も連絡出来なかつたですが、生まれ変わつたらまた仲良しくしてくださいね……

「いや、失礼した」

「……何がですか？」

不意に、レイが頭を下げる。

「人を見掛けで判断するな。という言葉が我等人間にはあるが、聞きかじった知識のみで悪魔を知った氣でいた私の愚直さに呆れた。エリザベスとやら、お前を淫魔というだけで誇りを傷付けるような発言をしたこと。この非礼を詫びよう、すまなかつた。

そして試すような結果になってしまったが、俺はお前が何を目的に人間界に来たのかは知っている。すまないが鞄の中にあつた書類を読ませてもらつた」

「な……どうして人間に悪魔の文字が読めたのです!..」

「なに、職業柄で悪魔についてはよく調べるのでな」

軽く言つて除けるレイ。人間というのは、誰かも彼もこのようないのばかりなんでしょうか。

謝られたことに関しては、少し嬉しかつたのは内緒です。

「よつはお前の目的は、人間観察というやつだらう。ここ数百年は魔の王も人間の地に踏み入つて、自ら戦を仕掛けることも無い。実際のところは知らぬがな……もしも、お前が自らの誇りを賭けて『人間の地を蹂躪する』ことが目的ではないというなら、見逃しても良い」

「…………」

正直なところ、このレイという青年の考えが分かりません。てつ生きり、人間は悪魔を嫌いして、見れば切り掛かるぐらいのものだと思っていました。

しかし、レイに提示されたこの条件……『人間界視察』という仕

事の書類を見る限りでは、戦争行動を感じさせる内容は無かつたはずです。

「さあ、答える」

「……分からぬのです。書類には戦争する目的のことなんて書いてないけど、本当は分からぬんです……！ だつて、だつて私はただのバイトみたいなものでやつただけなんですよん！」

それなのにあなたは、『誇りを賭けて』なんて……どう答えれば良いか分からぬのです……」

「それが事実かも分からん。答えることが出来ぬのなら……」

そう言つて、腰に帯刀した刀剣を僅かに抜く。

「……殺すんですか？」

「やむを得ん……」

「……男の人なんていつもそうです。自分の都合が悪くなつたら、私をけなすんです、売女と……。

でも……淫魔に生まれただけで、こんなにも辛いのなら、あるいは死ぬのも良いかもしれないです……ふふ……」

今まで振り返り、これから自らに起つる事態を思つと、思わず涙が出た。手を動かすことも出来ないから、とめどなく流れる涙は頬を伝つて、枕に染みを作る。人間に恥ずかしい姿を見られた羞恥なんてどうでもいい。このまま死んで、辛いことを忘れられるなら、それも良いかもしれないです。

「普通の女の子に生まれたかつたな……」

それを聞くのは、この場にはレイしかいない。なぜそんなことを言つたのかは分からぬ、思わず口から出たのですから。ただ、咳くと涙が更に流れ、余計に辛くなつた。

「人間にこんなことを頼むのは悔しいですが、その剣で一思いに、楽にして頂けませんか……？」

「…………」

田を閉じる。最後に見たのが自分を殺そうとする人間の姿とは、我ながら録な人生を歩みませんでした、歩めませんでした。

「……止めだ、これでは俺は悪者だ」

田と、生への希望を閉じた私の耳に、そんな言葉が飛び込んで来る。

「種族は違えど、麗しい女子^{おな}の涙は、どんな大魔術よりも強い魔力を放つものだ。

それに悲しそうに涙流す女の子を斬り殺すことが出来るほど腐つていな」

「な、泣いてなんか……」

涙を拭おうとしたんですが、如何せん体が言つて聞いてくれません。

「先程まで散々酷い言葉を吐きたくつていた俺が言えることではないが……その涙に偽りなどないと信じる。

数々の非礼、再び詫びよ。」

レイはそう言つて膝をつくと、剣を柄」と自分の中に自分の前に横たえて、深く頭を下げる。

「申し訳なかつた……貴方は我が騎士の誇りを賭け、責任を以つて家へと送り届けよう。」

「……そんなこと言つて、口を滑らせるつもりでは……？ 私は何も」

「そんな企みはないさ。」

ただ健気な女の子の弱い一面を見て、お前に惹かれた。信じたくなつた……どうだ、お前も俺を信じてくれるか？」

一転して、紳士的な口調になつたレイ。『騎士の誇り』と言つていたので、この国の騎士様なのでしょうか。

人間に同情されたということでしょうか、一瞬ではあるけれど、自らの人生を無駄と思つてしまつた……今までの自分とそれに連なる人達の行為を泡沫に帰す選択を取ろうとしてしまつた……

そんなことでは駄目、私自身に申し訳がたたない。ここは何としても生き永らえるのです。

「し、信じますっ！ だから殺さないでください……！」

「これって、誰かが俺見てたら俺つて『美少女を襲う変態』……？ 改めて言つが、殺さない。さつきも言つたろう？ 『お前に惹かれて、信じてみたくなつた』つてさ」

不機嫌さを感じる風で言い捨てるレイ。私、何か言いましたでしょうか。あれ……それよりも、

「ひ、惹かれたというのは何ですか……？」

「……言葉通りの意味だ」

「れ、恋愛的な意味ですか？！」

「ダイレクト過ぎるってー もう少し包み隠してやんわりとした表

現にしろっ！」

それ以前に、お前が考へてるような意味で言つたわけではない。

それに俺とお前は人間と悪魔、相容れんだろう」

「そ、そうですね……当たり前ですね、失礼しました」

今までこんな言い方で好意を伝えられたことが無かつたので、柄にもなく純情少女のように初心になってしましました。少しだけ嬉しかったです、否定などしませんよ。

「では……送るのは資料に書いてあつた家でいいか？」

レイが確認するように聞く。

「いえ、自分で行けるので……大丈夫で、す？」

「ああ、そうだな。お前の体が動くのならばな……？」

「……そうでした」

「まだ眠っているか？ 言つておくが、もうかれらそろ口をまたぐ時間だぞ？」

「ええ？！ そんなに氣を失つてたんですか！ 急がないと……！」

「まあ、そんなに焦るな。なんなら泊まつていつてもいいぞ？」

一ヤリと口角を吊り上げて、悪人面を浮かべるレイ。さつきまでの騎士道精神溢れる紳士然とした彼は何処に行つてしまつたのでしょうか。

それに、いつまでもやられてばかりの私ではありません、たまには仕返しの一つでもしてやらねば、悪魔の面目が立ちません。

「な、なななな、何を言ひてるんですかっ！　早く、早く家に帰してください！」

やはり無理でした。

ちなみに私の本当の家は、現在女性限定という名前で貸家にしてあります。残念ながら帰っても私の居場所はありません。

「ははは……すまんすまん。お前に冗談が通じんことは分かった、では家まで送りう！」

「分かったのなら止めてください……ね？」

こんな殿方は初めてです。今まで言い寄ってきた男性は、誰も彼も非紳士的な方ばかりでしたし、礼儀などありませんでしたのに。目の前にいるこのレイという青年は、紳士的な男性かと思えば、人の事を（悪魔の事を）からかいます。それも下的なニュアンスを含んだからかいです、これでは淫魔の名折れです。

「では、ほれ……」

レイはそう言つと、私に背を向けて腰を低くして屈みこんだ。

「ほれ……とは？」

「ああそつか。体が全く動かんだったな、仕方ない」

すると彼は、布団を除けると私の手を取る。あれ、そう言えば今のは服を……。私が何かを言つ前に、レイの顔が瞬く間に赤くなつていく。

「お、お前ー 服くらいい着う、やはり淫魔かっ！」

「あ、あなたが使用人に指示して脱がしたんじゃないですか、この野郎うつうつ！」

もし私の腕が動いたのなら、彼の頬を引っ叩いてやりたかったです。

最初の出会い（後書き）

「」感想やお気に入り登録してもらえたと、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

人物紹介：エリザベス

名前：エリザベス Name : Elizabeth

種族：淫魔 Race : Succubus of Pure blood

年齢：78歳

淫魔とは、闇夜に紛れて男性から精を絞りつくし、それを自らの糧とする悪魔である。

彼らにとって身の内に精を溜め込む行為は、成長するための手段である。そして、自身らの欲望を満たすための行為の一つである。彼らにとっては一石二鳥感覚である。

それ故に、淫魔は異常なレベルの快樂主義者が多い。大多数、というか全ての淫魔は例外なく快樂を好む。

また、淫魔は魔界における初代の『魔王』の眷族の末裔である。その身に伝わる純血は現在まで引き継がれている。それを象徴するのが、貴族である淫魔たちだ。現存する淫魔たちは、位や爵位の違いはあれど、ほぼ全ての淫魔が貴族である。

淫魔は子を宿せますが、その子は淫魔として生は受けません。淫魔とは自然に生まれ、生まれた時には既に自我というものがあり、自身を認識している。

つまり淫魔の貴族は一代貴族のようなものだ。しかし、淫魔は欲

望と快樂を追及することで、自然と力を貰えて、そして貴族になるのだ。

しかし、何事にも例外は存在するのである。

エリザベスは淫魔でありながら『純血』つまり『処女』だ。彼女は自身の性欲に従うことによく思わず、本当の意味で好意的に思っていない相手に、己の体に触れさせることを拒んでいる。

しかし、身の内には欲求は蓄積されていく。そのため定期的に動物で言うところの『発情』が起ころる。そんな時は家に引き込もり、なんとか自身を『慰める』という方法で性欲を押さえている。いつの日か、彼女が向かわれる日も来るのかも知れない。

身長：155cm 体重：（文字が塗りつぶされていて
読みない）

人物紹介：エリザベス（後書き）

こんな作ってみました。

不幸（前書き）

予約投稿の有効活用

不幸

どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は……空から木に墜落して体が動かないという事態に陥りました。

それに伴い、初めて出会った人間の男性に捕獲……もとい介抱されてしまいました。

その後、人間界での私の家に送つてくれると言つ話になつたのです。

彼は私に背中を『家までの特急だぜ?』と言わんばかりのドヤ顔を晒しやがつた後に『あ、体動かないんだったね』とほざきやがりました。

『仕方ない』と世話をかける子供へ向けるような表情をした後に、あらう事かほぼ全裸（シャツ一枚の下着なし）の私の体を隠す掛布団をはがしました。

「お、お前！ 服くらい着る、やはり淫魔かつ！」

更に更にあらうことが、私に責任の擦り付けを行使しました。

「あ、あなたが使用人に指示して脱がしたんじゃないですか、この野郎うづづづ！」

この場合、怒つていいのは私の方ですよね。

万人が見て、そう思うでしょ。

ですが、体の動かない私には僅かに指を動かす程度の事しか出来ません。

体が動くようになつたら、必ず頬を引っ叩いてやります。

「み、みみ見てないで、早く元に戻してくださいっ！」

私に大して『淫魔めえ！』と罵倒したくせに、いつまでも掛布団を手に持ち放心状態でいたレイに、もつ泣きそうになりながら叫びます。

心なしか、彼の視線が私の下半身に向いているような気がするは、きっと自意識過剰な私の眼の錯覚と信じたいです。

「う、ううむ……すまん。いや、なかなかに艶めかしい御足をお持ちで　うぶつ！」

怒りと羞恥の力は偉大です。

私は残された力　すなわち気合　　を使って立ち上がり、未だに放心状態のムツツリじやないスケベのレイから掛布団を引つたり、素早く体に巻いた後に、頬を引っ叩いてやりました。人型であるため、その力は人間並みであつたのが悔やまれます。無論、先程の分をあわせて二発です。

今、彼の両頬には綺麗な赤い花が咲いています。

「も、もう少し女性に対する配慮を持つてください、この変態っ！」
「　　っ……少し太腿を見ただけではないか、打つことは無いだろう！」

「貴方は騎士なのでしょう、でしたら紳士然としてください、この変態っ！」
「騎士であろうと俺も男だ、そして自然と目が行くのも男の性だ！」
「開き直らないでくださいっ！」

本当に、先程までの騎士と認めざるを得ない紳士は何処へ行つてしまつたのでしょうか。

あれ……？

「わ、私……立てています！ あつ、とと……」

しかし体のそこら中が痛く、まさしく満身創痍と言つた具合です。普通に立つていただけなのに足がガクガクで、つい倒れそうになりました。

「なんだ、立てるんじゃないか」「ええ……誰か様のおかげです」「ふ、礼には及ばん」「皮肉ですよ！」

私はそう一言残し、荷物の置かれた机へと亀のようにゆっくり歩み寄ります、これ以上のスピードはキャパシティの限界に達します。

「なんだ大丈夫か。手を貸そうか？」
「いいえ、大丈夫です。結構です」

懇切丁寧に、二重に断りを入れます。これ以上彼の手が私に触れる事態は、何としても避けなくは。

「荷物からは何も取つていらないんですか？」
「ああ。資料にしても、お前が倒れていた場所で、鞄から飛び出でいたから気付いただけだからな。それもちゃんと元に戻している」「そう……ですか。

治療に関しては礼を言わせてください、ありがとうございました。
それでは、失礼します」

お礼は欠かさず、淑女の常識です。

そして、私は再び龜の如く歩みで部屋の出口を指します。

「あ、おい！ 送つていいくと言つただろ？」

「いいえ、これ以上お手を煩わすのもいけませんので」

それだけ言って、私は部屋を後にしました。

「大きなお屋敷です。の人、やはり騎士でもそこそこ偉い方なのでしょうか。まだ若く見えたのですが……」

部屋を出ると、大きな廊下でした。

幸い、出口のある大広間はすぐ近くにあったので、迷わずにはみました。

一つ辛いことがあつたのは、一階に居たという事です。

階段を下りるのが本当に大変でした……手すりに体重を掛けながら、ゆっくりと降りることで事無きを得ましたが。

「それにしても、夜なのに活氣がある街ですね」

屋敷を出て豪奢な家（じゅうしゃ） もはや屋敷 が立ち並ぶ通りを抜けると、更に大きな通りに出ました。

人々の喧騒が、夜の暗さを追い払うような光景です。

通りの両側に立ち並ぶ様々なお店、それを楽しそうに見る客たち。客層もまた様々で、冒険者ぽい風貌の方や、恋人たち、遊び人、商人、果ては家族のような方まで。

途中、現在位置が分からぬので、友人たちと歩いていた男の子に聞くと、街の中心にある通りだと分かりました。

心なしか男の子の頬が紅潮して、嬉しそうに唇が歪んでいましたのは何故でしょう。

もしや、今の私の服装のでしょうか？

確かに掛布団を体に巻いただけなので、近くで見れば可笑しく見えるかもしません。

遠目で見ればマントかもしれませんが、確かにこれは笑いものです。

元々着ていた服は破れていますし、仮に破れていなくとも屋敷で着替えるのは、恐くて出来ません。

「おーう嬢ちゃん、何探してるんだ？」

私が手持ちの地図と睨めっこをしていると、不意に誰かに声を掛けられました。

「……？」

顔を上げると私の数m先で、柄の悪そうな男性が三人で徒党を組んで、私を見ていました。

見るからに小物臭のする方々です。

「夜中にこんな場所歩いてたら、危ない人らに酷い事をされちゃうぜー？」

「違ひねえ、ひつひつひー！」

三人の中心に立つ、一番がたいの良いリーダーらしき男性が言う

と、他の一人が顔を歪めて、厭らしく気持ちの悪い笑い声を出す。

「あなた方には関係ありません、どうぞお構いなく」

「おいおい、それは無いぜえ嬢ちゃん！ ちょっとくらい構つてくれてもいいじゃねえかー？」

一々構つていられないと判断し無視に徹し、私が隣をすり抜けようとするが、リーダーらしき男性が私の腕を乱暴に掴む。

「…………っ！ 離してください！ 離さないと…………！」

力を入れて振り払おうとするけれど、男の手は岩のように固く、全く動かない。

ただの人間にどうしてこんな力がある……？！

動搖しつつも、なんとか身の内の魔力を……素早く操作出来ない。

「あ…………」

とんだ馬鹿なことをしていた。

今私は、殆ど人間と変わらないんでした。

腕力は人間の女性にも劣り非力、魔力も常に比べると遙かに劣る。

「なんだなんだ？ 抵抗するんだつたらちょっと乱暴になっちゃうよ、お兄ちゃんたち？」

「抵抗しなくとも乱暴じゃねーか！」

「ひつひつひい！」

下賤な言葉を吐き出して、再び笑い出す三人組。

なんとかして逃げないと。

「離して！ 人を呼びますよー。」

キツと睨みつけるも、男は厭らしい笑みを浮かべたまま私を見たまま。

「誰か！ 誰か助けてくださいー。」

辺りを見回して声を出しが、誰も居ない。

さつきまでの喧騒が嘘のよつに静まりかえり、私と男たち以外には、誰もいない。

「当たり前だろ、裏通りなんだからよお？ 通りはあるの騒ぎだ、大声で叫んだって誰も気づきやしねーよおー」「そんな……」

しまつた……地図に集中して、全く辺りに警戒していなかつた。最悪だ、最悪の落ち度だ。最悪の展開だ。

「もういいだろ、身ぐるみ剥いでーじでヤッちまおつぜ？」「かー、相変わらず気が早いやつだな、まあ嫌いじゃないけどな」

仲間の一人がそう言つと、リーダーらしき男の太い手が、私の服
掛布団 を脱がそうとする。

「止めて！ 止めてくださいー。」

「おいおこ、これマントと思つてたらただの毛布じゃないか？」

抵抗の言葉も行動の甲斐も無く、あいつと服を取られてしまつ
私。

「つて、なんだその格好！ 最初っからその気でここに来たんじゃねーのか？！」

「違います！ 私を他の淫魔と一緒に

「あー、分かつた分かつた。大人しくしろって」

暴れる私の言葉を適当に受け流し、残り一枚になった私のシャツをも剥ぎ取ろうとする。

鼻息が、呼吸が荒く、目も血走っている。

「止めて、誰か助けてっ！」

助けを呼ぶも、その声に応える者は誰もいない。

どうして、どうしてこんなことに……？

今までの気分を変えて、誰も私の正体を知らない人間界に来たのに、結局こんな形になるの？

どうして。

淫魔であって、淫魔としての生き方を選ばなかつた私には、幸せになる権利なんて……無いの……？

「いかに治安の保たれた国であろうと、その陰にはクソ共が蔓延つ

ている。

どんな国だらうと、それは変わんないんだ。
知つてたか ハリザベス？」

「…………え？」

聞き覚えのある声に振り返る。

そこには、黒いズボンに薄い青色のシャツと、ラフな格好をした
レイが居ました。

服装とは対照的に、その手には銀の光を放つ刀剣を持っています。

「おい。 んだてめえ、邪魔すんのか？！」

「邪魔とは人聞きの悪い……その女は俺と先約だ」

ゆっくり一歩踏み出し、私の方へ近づいてくるレイさん。
その一步は余りにも優雅で、空から差し込む月明かりで幻想的に
すら見えた。

「なんだ？ やろつてのか？ おい！」

リーダーらしき男性が仲間に声を掛けると、二人の仲間は一つ頷
いて、腰にそなえた短剣を取り出してレイに飛び掛かった。

「はあ……これも仕事つて考えるか……」

しかしレイは臆することなく歩を止めず、ため息を付いて余裕す
らあるように見えます。

「つち、嘗めやがつ
「はあ？」

背後のリーダーらしき男性が、素頓狂な声を漏らす。

それもそのはずで、動きらしき動きを見えないレイを前に、二人の仲間が倒れたのですから。

人型であるせいで動体視力が低下してるとは言え、私にも銀の線が空を裂いたのしか見えませんでした。

「おい、そこのお前。今すぐ消えろ、五秒以内に消えなかつたら本当に殺す」

レイがリーダーらしき男に冷たく言い放つと、私の腕が離して仲間の事など放つて、素晴らしい逃げ足を披露して去つて行った。定番の言葉すら言わずに逃げるとは、小物の中の小物です。

「お前の住むはずの家はな……もの国でも治安の悪い場所に位置する。

こんな奴らがそこいらにうろついてる様な場所にな

言つてレイは地面に転がる二人を蹴る。

「だからこそ、体の動かんお前を送つてやうつと思つたのに、これだ……」

「すみません……」

「何が手を煩わせたくないだ、余計に面倒かけやがつて

「すみません……」

「あーもう、すぐ泣くな

「うつ、泣いてません……！」

緊張の糸が切れ、油断して涙腺から水滴が少しじぼれました。
「こんな短時間で、しかも同じ男性に涙を見られるなんて、恥ずかしくてたまりません……」

「ありがとうございます……」

「……まあ気にするな。もうすぐそこだから、今度こそ送つていいくからな」

「ありがとうございます……」

地面に座り込んでいたので、立ち上がりたいとするが、足に力が入りません。

無理が祟ったのかもれません。

「すいません……ちょっと、待つて……」

再度力を入れようとするが、立てない。

「あれ、可笑しいな……あつ」

隣で見ていたレイが見兼ねたのか、私の手を持つて抱き上げる。俗語で言えば『お姫様抱っこ』の状態です。

事前に掛布団を体にかけるという、紳士スキルを再発動するのも忘れていました。

「見ていいられない。お前本当に淫魔か？高位の悪魔か？」

「……すいません……」

からかわれるも、返す言葉もなく謝ることしか出来ませんでした。

「……急にしおりこくなつやがつて…………」

そう言つと、レイはそれつきり黙つてしましました。
私も顔を布団に埋めて、何も言ひません。

レイの腕は細く、しかし先程の男以上に力強いものでした。

そして何より……恐くありませんでした……

不幸（後書き）

一人称に不自然さを感じます。

戦闘の描写と、エリーの心理描写は別にした方が良いですかね？
つまり戦闘＝三人称 エリー心＝一人称 みたいな感じです。

教えてください！

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいです！

提案（前書き）

1日2話更新だと……書くのが楽しくて仕方がない！

「どうも、淫魔のエリザベスです。

不幸続きでめげそうですが、何とか生きています。

最近は、人間にも不器用だけど優しい方が居るのを知りました。やはり偏見や先入観だけで判断するのは良くないですね。

「なかなかに良い家だな、鞄はどうに置く?」

「あ、そこの机の上にお願いします。ありがとうございます……」

家は一階にキッチンを備えたリビングと密間、二階には洋室と空き部屋が2つ。

一人暮らしには豪華すぎるものでした。

そしてレイ『さん』の家からすれば、一般市民の家のほとんどはあばら屋と変わらないでしょう。

「どうした、本当にしおらしくなったな?」

「だって命の恩人です。礼儀を欠いては淑女の名折れですから……」

「命つて、大袈裟な……」

「私にとつて純潔とは命と同位のようなものですー。」

これまで守つて来たのに、もし失つてしまえば、他の淫魔との違いが一つ減つてしまします。

純潔であることは、『淫魔エリザベス』の象徴でもあるのです。そして、もしレイさんが居なければ、それを守ることが出来ませんでした、故に彼は命の恩人なのです。

「す、すまん……。

なんとか、お前は淫魔らしくないな。変わつてこりとこりか、やはり他の淫魔とは違つ

私の表情に鬼気迫る感があつたからでしょ、少しうきかれました。

「ほ、本当ですか？　どこら辺がですか？」

「そうだな……確かに誘惑をしたりと、ふしだらな印象はない。だが、お前が言う通りに『淑女』を意識しているせいいか、種族の特性も相まって独特な『妖艶さ』を醸し出しているような……」「よ、妖艶さ……つまりそれは……え、エロですか？！」

「ぶつ！　だからもう少し包み隠してやんわりと言え！」

私としたことが、妙な言葉を……

しかしレイさんの言う事が確かに、私の7~8年間やつてきたことは、私の目指すものと反比例する結果を生み出していたところです。

「リリが寝室みたいだな、よつと……」

寝室と思わしき部屋を見つけ、扉の前で立ち止まつたレイさん。扉のノブを捻るために屈んだのですが、依然私を抱きかかえたままであるため、不可抗力で私の顔と急接近。

「わ……」

近くで見ると、レイさんは意外に幼い顔立ちをしていました。

女の私から見ても、可愛いと思える顔立ちです。

でも、童顔と言う程でもなく、大人と少年の境目くらいでしょうか。まさに青年と言つた風です。

「わわ……」

これまで男性に長時間体に触れられる」とも、こんなに近くに寄られたことも無かつたので、言葉も出ません。

「あ、すまん……ドアを開けよつと想つて
「わ、分かつてます……お気になさりや、……」

命の恩人です。」んなことで一々怒つていては、私自身の度量が知れるというものです。

羞恥で狼狽する私と対照的に、レイさんは精々頬を赤らめる程度です。

もしかしたら女性関係には慣れている方なのでしょうか。

「ん、じゃあ下すぞ?」「
「あ、はい。お願ひします」

ベッドの前まで来たレイさんが、ゆっくりと私を下ろし、掛布団を掛けてくれる。

やはりこうこう場面では、しつかじと紳士的な一面を垣間見せるのですね。

「あの、レイさん……?」

「ん、何だ?」

「レイさんは、女性との関係は豊富な方なんでしょうか?」

布団から首だけを出す私は、気になっていた事を聞いてみることにしました。

「何故そんなことを聞く」

「いえ……私を抱き運ぶのも、顔が近づいたりしても狼狽えたりしなかつたので、思い至ったのですが……」

しかしレイさんの答えは、意外なものでした。

「いや、女性関係に関しては無知だ。恋仲になつたこともないし、女と話すのは仕事関係の人間くらいかだ。

ましてや個人的に話すとなると、使用人くらいだな」

「そ、そうなんですか？ その割には色々と慣れてらつしゃるつりみのにお見受けしましたが……？」

「うむ、家訓で『女性には紳士的に応対せよ』と、幼少の頃に父に言われてな。先程までの対応も、俺の出来得る精一杯だ」

だとすれば、シャツ一枚しか着ていらない女性が寝ている布団を剥いだ時点での、家訓を守っていないですね。とは言いません。

レイさんの言葉から考えるに、今まで女性と接する機会が極端に少なかつたので、どう接すればいいか分からなかつたのでしょうか。人間界の騎士という役職は、女性関係には厳しいと耳にしますしかくいう私も、男性とは親密になつた経験がありませんから、他人の事をどうこう言つことは出来ません。

「……では改めてお礼を言わせてください。危ない所を助けて頂き、本当にありがとうございました。レイさんの」好意を無碍にして、その結果、更に余計にお手を煩わしてしま

「ああ、もう良い。俺が好きでやつたことだ、それにそこまで畏まなくていい。本当にお前は悪魔、それに淫魔か？」

「……あつがヒーリーを出す。近づかし、お礼をさせて頂きます

流石ヒーリーまで言われば、素直ヒーリー好意を受けるしかありません。

一度も好意を投げ捨てるのは、淑女としてやつてはいけませんからね！

でももちろん、お礼を返すのも忘れません、淑女の常識です！

「別に良いんだがな……それよりお前は

「レイさん？」

「な、何だ？」

レイさんの言葉を途中で遮る私。

「失礼ですが、あまり『お前』と言われるの好きではありません。
どうぞヒーリザベス……いえ、ヒリーとお呼びください」

「あー、分かった。では、ヒリー？」

「はい、何でしょう？」

先程から感じていた違和感は、レイさんが私を『お前』と呼んでいたからだったようです。

普段会話する人は、総じて私をヒリーと呼ぶので、やはりヒーリーの方が小気味も良いです。

「ヒリーは」の家に住むつもりなのか？」

「？　はい。ところがもつ住民登録は済ましてると思います。どうしてですか？」

「ああ、さつき襲われたことで分かつたと雖しが、この辺りはグラベルの中でも治安の悪い地域だからな。

田中は多少はマシだが、日が沈むと『あの通り』だ

グラベルとは、この国 都市 の名前です。

商業都市グラベルと呼ばれていて、大陸で最も商業や工業が繁栄している国です。

また都市面積の5分の1はなんらかの工業地で、常に熱した鉄などを打ちつける音が鳴り響くこと、常に商人たちの活気の良い声が止まないことから、『眠らない都市』との別称もあります。

しかし5分の1もの面積が工業地なのにも関わらず、残りの部分だけでも他の大国の倍以上の大きさがあります。

勿論、都市人口も他の追随を許さない多さです。

また多種多様な武具を産出しているため、荒事を生業なりわいとする方々多く滞在しています。

そんな荒くれたちが問題を起こした時に抑えたり、国の治安維持や警備、有事の際の 他国からの侵略 防衛などの為に『国兵』と呼ばれる軍隊も存在します。

『国兵』と言うのはあくまで総称で、主にレイさんのような騎士などが当て嵌まります。

それとは別に、雇われて国に就く傭兵と呼ばれる冒険者ぼうけんしゃさんたちもいるそうです。

ふう、事前に勉強していく正解です！

「まあ、つまり。可能であるならば、なるべく大通り近くに面した場所に引っ越すことを勧める。

通りなら真夜中でも人もいるし、何より警備兵がいるしな。まあ

よつぱどの馬鹿意外はモメ事は起じれないと

「なるほど……」

「まあ……！」でも田中に移動するべからうなら、フードなんかで顔を隠せば問題ないだろ？」「

「フードですか？ 那は必須ですか？」

「ああ。女、エリーならば尚更必須だろうな」

女性、それに渡しならば必要不可欠…………？

数秒の間その意味を考えましたが、答えが出ませんでした。

「えつと、どうこう意味でしょ？」「

「…………お前は自分の器量の良さに自覚はあるか？」

「あつ、また『お前』って言いましたね！」「

「つまり！ お前みたいな見田麗しい美少女が裏通りを闊歩かっぽしてたら、性欲を持て余したサルみたいな連中の恰好の獲物つてことだ、わかつたか？！」

レイさんは呆れた顔で溜息を吐くと、人差し指を私のおでこに押し付けて、一息でそう言いました。

「それは…………つまり強引に性交を強要されるところですか！」

「だからもう少し包み隠してやんわりと言ええーいー！」

「つ、唾が飛びました……」

「あ、ごめんなさい」

息を荒げたレイさんでしたが、私が不満を口にするとハンカチを取り出して顔を拭いてくれました。

息は荒いまま顔を拭いてくれたので、少し怖かったです。

「確かにレイさん言つよつに、私の姿は…………その、種族上の理由

で綺麗なのがもしけません。

ですが、早々に引っ越しをしようにも、『視察』の本部に連絡をするにも時間かかります。それに、そんな自分勝手な理由で余計なお金を掛けることも出来ないと思います。……。

生活する分のお金は十分に支給されますが、『視察』するための過程で労働するつもりです。

ですから、その際に稼いで賃金で引っ越しをします。……

私自身もこんな危なつかしい場所で、最低でも6ヶ月 契約期間 を暮らしたくはありません。

幸い、賃金は全て引っ越しに回せますし、1、2ヶ月も働けば何とかなると思いますし。

「ふむ……エリー、少し提案があるのですが」「はい、何でしょう?」

レイさんは少し逡巡した後に、良い考えを思いついた子供のような表情を浮かべ、私に語りかけてきました。

「俺の屋敷に住まないか? 幸い、部屋は腐るほどに余っているからな」

「え、ええ?! それはイケませんよ、申し訳ないですしつー!」「いいって、それに……」「そ、それに……?」「エリーに興味が湧いた。

悪魔とは俺が討つべき存在だと叫ぶのに、その悪魔と同居しようと思つなど、全く以て滑稽な話かもしけないけどな

快活な笑みを浮かべるレイさん。

その表情には、仮にも悪魔である私に対する警戒などまるであり

ませんでした。

そもそも悪魔……それも精を絞り、男性の心を奪つ淫魔である私に、同居を提案するなんて正氣の沙汰ではありません。

「正氣ですか、私は淫魔ですよ？ 私があなたから殺されるのを何とか免れるために口八丁を並び立てて、後に然るべき報復……つまり夜這いする可能性も無いわけではありません。

そんな私に同居の提案をするなんて」

「ふむ……では夜這いされたときは、後先考えずに楽しむとする」「な、何を言つてるんですか？！ そんなことするわけないでしょう？！」

「はははっ！ やはりエリーならば大丈夫そうだ、気にせず屋敷に来い！」

再度、快活に大笑いするレイさん。

夜ですし、もう少しボリュームを落とさないと近所の迷惑になってしまいますよ。

そして私は、レイさんに「この手の話題は逆効果である」とことを学んだのでした。

もう休ませてください……

提案（後書き）

一応、世界観の設定なども作ってあります。
次回辺りで、レイの身分的な物が分かるかも。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいです！

都市紹介・グラベル（前書き）

二回更新……だと……？

都市紹介・グラベル

名前：商業都市国家グラベル Name : Commercial town state Gravel

大陸で最も商業が繁栄している都市。

都市面積の5分の1はなんらかの工業地で、常に熱した鉄などを打ちつける音が鳴り響くことと、商人たちの活気の良い声が止まないことから、眠らない都市とも言われている。

5分の1を工業地なのにも関わらず、残りの部分だけでも他の大国の倍ほども大きさがある。

工業地区からの騒音のため、グラベルの家々は防音構造の成された状態で建っている。と言つても、工業地区から居住区などは離れているので、大きな意味は成さない。

また、針から剣、斧、大刀と、多種多様な武具を産出しているため、商人だけではなく、刃物を使う職業も多く滞在している。

工芸品などのアーティファクトも多く、それらも国家資産の収入源になつていてる。

それに、その武具の種類の多さから、様々な職種の育成機関としての顔も持つていてる。

第一学区には戦闘技術や、戦場での指揮、兵法の教育などを主な学科とする学校も存在している。第一学区は一般的な教養を身に着けるための学校が存在する。

そして、各国には『冒険者』と呼ばれる者たちの機関『ギルド』が存在し、グラベルにも支社が無論ある。

ギルドは国民から王族まで、幅広い人間からの依頼を受ける。

報酬の依頼は数割をギルドが得て、残りは依頼をこなした冒険者などが受け取る事になっている。

ギルドの得た報酬金額は、ギルドの資金にしたり、国への税に使われる。

冒険者とは別に、國を守る者を『國兵』といい、これは國の王族の命令によつて行動する兵隊だ。

『國兵』といつのは國に就く兵士といつ意味での総称で、騎士や、王族の近衛兵や、一般兵、神殿兵、神殿騎士といった諸々の兵を含む。

國に雇用されて『傭兵』と呼ばれる冒険者たちもいる。

都市紹介・グラベル（後書き）

またその内別の場所で、設定集などを作るかもしれません。
ここで紹介を入れると邪魔だ！という方がいらっしゃれば言ってくださいな。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

承諾

『どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は……三人の悪漢によって真操の危機に瀕している所を、レイさんによつて助けられたり。

結局足腰立なくなつた私を、お姫様抱っこで家まで送つてもらい、その後レイさんが、治安の悪い地区に住む私の身を案じてくれて、『俺の屋敷に住まないか?』とお誘いを受けたりしていました。

「どうしましょうか……」

レイさんに家まで送つてもらつた夜の翌日、漸く体が動くようになつた私は、リビングで紅茶を飲みながら、昨晩のレイさんからの提案について考えていました。

提案を『申し訳ないです!』と、頑なに断りつづけていた私でしたが、レイさんは『そうだ、ならばこうしよう』と何かを閃き、私に幾つかの条件を提示しました。

レイさんの言う条件はこのようなものでした。

『屋敷の一部屋を貸す代わりに、部屋の掃除や管理は自分ですること

当然です。私とて借りる立場になれば、そのくらいはしないと申し訳がたちません。

『俺が使用人に頼んでいるのは、屋敷の掃除や管理のみだ。炊事洗濯などの、俺の身辺のことは頼んでいない。端的に言えば料理を作

つてくれ、もう加工食品は飽きた』

これも、料理くらいならば大した手間もありませんし、問題ありません。

自分の一人の分が、二人分に増えるだけですものね。

ただ、最後の一つが……

『俺の右腕になってくれ』

もちろん、物理的な意味ではありません。

私も右腕一本を犠牲にしてまで、レイさんの屋敷に住みたいとは思いません。

この話をした時に、レイさんが私に改めて自己紹介をしてくれました。

何を隠そう。レイさんはこの国の『魔法騎士団』の団長らしいです。

何でも新生の団らしく、比較的若い、そして有能な騎士を募つて作り上げた団と言っていました。

レイさんは18歳になつたばかりだそうですが、名のある貴族の生まれで、尚且つレイさんの実力も折り紙付きらしく、王様からお声が掛かつたそうです。

つまり。レイさんの言つ右腕とは、仕事上での補佐役的な意味を示すようです。

仮にも悪魔ですので、多少の戦闘をこなすことも出来ますし、事務仕事でしたら魔界に居る頃からやっていて慣れています。

お給金も貰えるようですし、良いことづくめであることは確かです。

確かなのですが……

「男性と同じ屋根の下、共に暮らすと言つのは如何なものでじょう……夜になると使用人の方も居なくなるようになりますし……」

迷います。

レイさんは命の恩人で良い方ですが、やはり男性と同居と言つのは……。

正直な事を申し上げますと、実は私は『男性恐怖症』です。昨晩のように、男性に性的な暴力を受けそうになつたことも一度や二度ではありません。

私が何度も転勤を繰り返している理由がそれです。でも、他の男性に比べるとレイさんは格段に優しく、素晴らしい御人ですし、暖かい人ですし……。

「はあ、いくら考えてもキリがありません……。

と、といふか、どうして私はレイさんの事ばかりを基準に考えているのでしょうか……？」

そうです。

今私が悩むべきは、男性と同居することを私が良しとするかしないかです。

……いやいや。でもやっぱり同居するとなると、優しくて信頼出来るような方が良いのは事実です。

同居人も重要なポイントの一つですね。

その点レイさんは、女心を知らないところもありますけど、騎士道精神的にも彼の紳士さを見ても信頼は出来そうです。

というか、私に女心云々を言つ資格は無いですね、私も男心が分かりませんし。

「もうすぐお昼を過ぎてしましますね……」

昨晚レイさんは『明日の昼頃にまた来る』と言つて帰つていきました。

レイさんが時間にルーズな人でなければ、もうそろそろ家に来る頃でしょう。

「それなのに……まだ答えが決まっていません……。

そう言えば、男性を自分の家に入れたのは初めてでしたね」

人間界に来てから、初めての事ばかりです。

「せっかく来てくれて、何も出さないのは失礼ですね。レイさんは紅茶は飲めるんでしょうか……？」

思い至った私は、椅子から立ち上がり手慣れた手つきで新たな紅茶の準備を始めます。

魔界に居た頃は遊ぶ友人も居なかつたので、家の中で出来るインドア派の趣味を多く持っていました。

紅茶を入れることが出来るのも、その名残です。

「男の人は、砂糖は入れないんでしょうか……？」

偏見でしょうか？ とりあえず、机の上に角砂糖を置いておきます。

丁度お湯も入れ終わり、準備が出来た頃に、見計らつたとも思えるタイミングで玄関を叩く音が響き渡ります。

『エリー、俺だ』

「あ、はい。今開けますね！」

待たせる訳にもいきません、素早く玄関戸を開けます。

戸を開けた私を見たレイさんは、驚き寄りの表情を浮かべていました。

「その恰好はまさか？」

「はい元の姿です。人目もありませんし、それにレイさんには淫魔だつてバレてますもん」

「それはそうだが……な、なんというか、中々に前衛的で色香漂う恰好だな……！」

「ええ？！ そ、どうでしようか……？」

レイさんに言われて、自身の体を見下ろします。

人型の時のような服装ではなく、魔力で構成されている淫魔の一般的な服装です。

とは言え、流石に他の淫魔と同じ服装だと、肌の露出面積が多過ぎるので、私は肌は最低限しか曝していいはずなのですが……。

「ですがこれで前衛的ならば、他の淫魔たちの恰好は時代を先取りしているレベルだと思いますよ？」

それに肌も露出も少ないと思つんですが……？」

「確かに露出は少ないが……何と言うか服がピッヂリとしきぎいで、その、か、体の線が……」

言われて気付きましたが、確かにピッヂリとしているかもしだせん。

魔界は人間界に比べて寒いので、いつも外套などのコートを着ていたので気にしたことがありませんでした。

肌の露出を無くすことばかり意識していたせいで、他の部分が完全に疎かになっていました……。

せりに、レイさんに言われたせいで、妙に恥ずかしくなつて来ました。

普段は当たり前と思っていたのに、急に根底の部分を覆されたせいで、羞恥も倍です。

「あ、あのー。出来ればあまり見ないでください……
す、すまん！」「れ、使っていいぞ」

胸元やうを隠し、羽織るものを探しだした私に、レイさんは一つ謝罪を述べると、自分の上着を差し出してくれました。
それを断るには、羞恥の力が強すぎて無理でした。
有り難くお借り致します。

「と、とにかく上がってください！　レイさんは紅茶は飲めますか？」

氣を取り直して声を張り上げた私に、レイさんは頷く事で返事をしました。

椅子に座り紅茶を差し出すと、お互に言葉も無く、しばらくはティータイムを堪能しました。

…………私は少し重苦しい空氣でありましたが

「で、どうする、もう決めたのか？」

お茶を飲み終え、私が片付けを済まして椅子に座り直すと、レイ

さんから話を切り出しました。

「……まだ、少し悩んでいます」

「ふむ……何に対しても悩んでいるのかは教えてくれるか?」

「やはり、男性と同じ屋敷に住むのは抵抗があると言いますか……」

「それによく夜には一人きりになるのでしょうか?」

「初心な淫魔も居たもんだな……」

「すいません……」

「実際、それで踏ん切りが着いていないのですから、言い返せません。」

かと書いて。今この家で暮らしたいわけも無いですし、実質答えは決まっているようなものなのですが、それでも首を縦に振るのには勇気が要ります。

「やつぱり、男の人は……怖い、ので……」

「……それは昨日の一件が原因か?」

「いいえ、人間界に来るずっと前からです。

向こうで仕事をしている時にも、何度も男性に……襲われそうになつた事があつたので……。

触れられるのは怖いですし、近寄られるのだけ怖いです」

レイさんが、昨晩私を抱き抱えたことでも思い出したのか、表情を悲しそうに曇らせる。

そんなレイさんを見て、何故かとても酷いことをしたような気分になりました。

……決意します。

「でも……でも、レイさんは他の男性とは違つ気がします。昨日抱っこされた時も、怖くなかったです。なんだか……あつたかかった

です。だから……」

「…………」

「お家にお邪魔させてもらつても良いでしょつか？」

レイは、呆氣に取られた顔をしています。

それもそのはずですよね。話の流れからして、断る雰囲気を醸し出していたと、自分でも思います。

「人間と悪魔だと、文化の違いもあると思います。

ですので、その点は『指導のほどよろしくおねがいしますね』

まあ、初めてばかりのことです。

今更新しいことが増えたところで、大きな変化はないでしょう。

それに、自分自身の成長（男性恐怖症の克服を含め）にもなると思います。

うん！ レイさんですし、大丈夫ですよね。

承諾（後書き）

ちょっと短めかな？

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいです！

お買いもの1

「どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は、レイさんのお屋敷に住まわしてもいいことが決まり、色々と忙しい時間が続いています。

魔界から人間界に引っ越したところに、来て早々にまた引っ越します。

良い家だったのに、たった一日しか使ってあげられなくてごめんなさいね。

今は荷物の整理を行っているところです。

と言つても、大体の衣類や生活必需品などはこれから買つてしまひましたので、荷物は多くありません。

レイさんは、出した紅茶とお菓子と戯れてもいいります。

取りあえずレイさんのお屋敷に行く前に、服を買いに行かせてもらいましょう。

持ち合わせている服は、昨日の一件（木への墜落）でボロボロになつてしましました。

今後は人型でいる機会も増えることでしょうし、何着かは困らない程度に買っておく必要があります。

「お待たせしました。住民課へは後日行くことにします。持ち合わせの服が無いので、服を買いに行きますから、先にお屋敷に戻つていてもらえますか?」

リビングに戻り、丁度紅茶もお菓子も食べ終えたレイさんに声をかける。

「いや、服くらい付き合いつ。

それに、まだこちらでは分からぬ事が多いだろ？ 服を売つている店くらいなら紹介できる

「ふむ……それではお言葉に甘えます。」案内よろしくお願ひします

す

腰を折つて、しつかりとお礼をします。

大通りの店を一軒ずつ見る手間も省けそうですし、時間の短縮にもなりました、レイさんに感謝です。

「上着はそのまま着ておけ。エリーの体格なら大きいぐらいだし、裾の短いマント代わらへばにはなるだろ？」

「あ、感謝します……」

衣服が無い現状、全裸で外を歩くのは、羞恥を通り越した何かを発見に目覚めるきっかけになり兼ねません。

……いや、やりませんけどね？

「しかし、下着だけでも無事で良かつたです。流石に下着無しで街中を歩くのは、レベルが高すぎますしね……」

「違いないな」

クスリと笑うレイさん。

やはり笑い顔は、そこいらの少年たちと同じ可愛らしい笑みです。

「丁度昼時で通りや市場も賑やかだろ？ ついでに眺めるのもいいかもな……じゃあ行くか」

「あ、はい！」

レイさんは椅子から立ち上ると、軽く伸びをして外へ続く扉へ

と歩きはじめた。

私も荷物を背負い後に続き、活気に溢れるグラベルの街へと赴きました。

「ふわあ……やっぱり夜よりも人が多いんですね！」

大通りは人で溢れています。

夜に比べて、商人や一般人が多く見えます。
やはり商業大国の大通りと言つたところでしょうか、人は驚くほど多いけれど、それでも通りには空間のまだ余裕があります。

「祭がある季節は、この通りが人で埋め尽くされるんだぞ？」「この通りがですか！」

驚きます。

魔界では人が何処かの場所で溢れ返ることなんてありませんでしたし。

キヨロキヨロと視線を巡らす私を、レイさんは面白そうに眺めています、何が面白いんでしょうか？

目に見えるもの全てが新鮮に写ります、美味しいしあつに輝く、甘そうな柑橘類の果物なんて魔界では滅多にお目にかかるません。

機会があれば口にしてみたいなあ……

「それを一個くれないか?」

私が物欲しげな視線で、件の出店の果物を見ていると、不意にレイさんがその店の店主に言いました。

レイさんが選んだのは、私が見ていた赤色の果物でした。

『ついーーー! 兄ちやんありがとよつー!』と、威勢の良い声を上げる店主から果物を受け取ると、そのまま私に差し出しました。

「ほれ」

「え……良いん、ですか?」

「あそこまで物欲しそうな目をしていたら、無視は出来ないからな」「し、失礼な! 私はそんなに意地汚くありません!」

私はそんなに食い入るよう見ていたのでしょうか?
そして、もし本当にだつたとして、その姿を見られていたとすれば

……最悪です……。

「ふむ、要らなーいことか……じゃあ俺が食つても?」

「うーーー頂きます、欲しいです……!」

「くくく、最初からやつと言えばこいんだ」

俯きながら差し出された果物を受け取る私に、レイさんがからかい混じりの声をかけます。

「ありがとうございます……」

しかし、どんな時でもお礼は忘れません。

「おい兄ちゃん、あんまりイジめてやるなよ。
まあ、良い客寄せになつて良いんだがな！」

私たちのやり取りを一部始終見ていた店主にそう言われ、辺りを見回すと幾許かの人が笑いながら私たちを見ていました。
レイさんは涼しい顔をしていましたが、私にとつては恥ずかしさに拍車をかける以外の何物でもありません。

「も、もう早く行きましょうレイちゃんっ！」

私はそれだけ言つて、わざわざ歩きます。

「まあ、やつ怒るな。早く食べてみろ？」

後から追い掛けで来たレイさんにそう言われ、食べ物に吊られて気分になりつつも、果物を口にやります。

『シャクッ』と小気味よい音を立てる。

口の中に入った果実を噛むと、驚くほど簡単に果肉が噛み切れて、同時に大量の果汁が出ました。

噛むほどに果汁は溢れ、口内に甘みが広がりました。

「……すく美味しいです！ こんなに甘くて美味しいもの初めて食べました！」

思わず立ち止まつてしましました。

「お、大袈裟じゃないか？ ただの『スカーレットフルーツ』だぞ？」

「これは『スカーレットフルーツ』と言つんですか？」

「いや、正式には『シュガーレッド』という果物だ。まさか知らないのか？」

レイさんが驚いた風に、私に聞き返します。

「魔界では果物は珍しいんですよ？ 食文化も人間界とは全く違いますし、甘い物は少ないですし、香辛料の種類も乏しいです。食文化に関しては、圧倒的に魔界は劣っていますね……」

「そうなのか。だからこそ、その驚きようか」

「はいっ！ ありがと、レイさん！」

精一杯の笑顔でお礼を言いました、だつて本当に美味しかったんですよ？

と、これでは私が食いしん坊の位置付けになってしまつ。

「別にあれくらいい……ほり、早く行くぞ」

レイさんは何故か顔を赤くして、私から顔を背けるとさつと歩き始めてしました。

「あー、はい！」

疑問に思いつつも私も歩き出し、再び一人で服屋を目指します。

「レイさん……私はどちらのお金はあまり多く持っていないのですが……」

レイさんに連れて來た店は、いかにも貴族御用たちの商品の平均価格がふざけたインフレーションをしてそうなお店でした。見るからに高そうです、何故こんな曖昧な事を言つているかと言つと、商品に値段が書いていないからです。

値段の書いていない服屋なんて初めてですよ。

「ここは……少し高いんですけど……？」

庶民的思考の私には、踏み入り難いお店です。もう入ってこますが。

手持ちのお金では、ここにある一着すら買える気がしません。三十六計走るを上計となす、直ぐさま逃げましょ。

「そう硬くなるな。心配しなくても、金は払わなくてもいい」

ジリジリと後退し、店の外へ出よといしていた私に、レイさんが声を掛ける。

「この店は、俺の家の『モノ』だ、商品自体は原価以下で買える。適当に見繕つて選んで来い」

「『モノ』って、経営者なんですか？！」

「と言つよつつかは、創立者だな。俺の代ではなく、数代前が作った

らしく

レイさんは軽く言つて切ると、『ああ、早く選んで来い』と言葉で私の背中を押します。

しかし、良いのでしょうか……

「先程から、ずっとお世話になりっぱなしで……良いんでしようか

？」

「良いひで吉ひでるだらう……？　あ、いや待て」

「え、はい。何でしようか？」

「一着だ。上下合わせて一着は俺に選ばせてくれ」

つまり、私の服の一着を選び立てるところとでしようか。

「それくらい、もちろん構いませんが

「　よし、じゃあ始めだ！」

レイさんはずつと、サッと店の奥へと消えて行ってしまいました。

「意外に破天荒なところもあるんですね……」

レイさんが居なくなつた後に、そんなことを呟きます。

レジのあるカウンターを見ると、店員らしき人が苦笑して『「いやつくりどつぞ』』と視線を送り、お辞儀を一つしてくれました。

私もそれに礼を返し、自分も服を選ぶために店を歩きはじめます。

「さて……選びましょーつヒー。」

お賣こやの1（後書き）

長くなつたので、1と2に分けました。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったら
ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

お買いもの2

「さて……選びましょーつとー。」

魔界では服屋なんてありませんでしたし、個人的に職人に頼んで作ってもらうくらいしか、服を得る方法なんてありませんでした。食文化や衣類などの技術的な分野では、魔界は人間界に遙かに劣っているのですね、これも『視察』の報告書に書いておきましょう。

そして私も女です。

お洒落に興味がないと言えば嘘になります。

食事はレイさんのお屋敷で賄ってくれるようなので、ある程度のお金は残しておいて、少し多く服を買ってみても……いえいえ、まだ人間界には居るのでですし、そんなに焦る必要はありません！

そういうえば、一着当たりどれくらいの値段になるのでしょうか…？

レイさんは『原価よりも安く買える』と言つていましたが、それでもここは外装、内装ともに貴族が来るようなお店です。

彼らの『安い』の基準と、私の安いは違う可能性もあります。

参考程度に店員さんにお聞きしてみましょう。

「す、すみません、こちらは一着でどれくらいするのでしょうか…？」

考えてみれば、人間界に来てレイさん以外の人間と話すのは、これが初めてです。

緊張して少し声が上擦つうわづってしまいました。

良く言えば整然とした、悪く言えば堅苦しい制服を着た女性の店員の方は、そんな私の様子を見て『家からあまり出ない貴族の箱入

り娘』とでも思つたのか、頬を緩めました。

「レイライト様のお客人と言つ」とで、一律で『グラベル銅貨3枚』となつております……」

ちなみに、一般的に商品の売買には銅貨が使われます。主に取引で使われるのは銅貨や精々銀貨で、金貨などになると商人間での大きな取引くらいでしか使われません。

銅、銀、金の硬貨にはそれぞれに様々な種類があり、各硬貨について市場での価値が違います。

価値の基準となるのは、名前を冠する金属の含有量で決まります。主に銅、銀、金の効果に混ぜられるのは錫です。

例えばAとBの銅貨があつたとして、Aの銅含有量が錫との比率で『5：5』、Bが『6：4』だと、Bの方が価値が高くなります。

今、店員さんが言つた『グラベル銅貨』は、この国の象徴硬貨です、もちろん国民や商人からの信用度もありますし、価値も高いです。

その時々によつて価格は変動しますが、銅貨一枚で外食一回分くらいです。

この値段ですと、服は当然……

「そ、そんなに安いんですか？！」

「余談ですが、通常ならば値段は『

「……ありがとうございました』

「はい、『ありがとうございました』

店員さんは笑顔で見送つてくれましたが、口にした値段は凶悪な悪意を感じるレベルでした。

高いとかではないです。少なくとも今の私の手持ちでは遠く及ばない値段でした。

「やっぱりあまり沢山買つのは止めましょう……なるべく安いうな、それでいて『目立たない』服を……！」

それから約1時間、初めての服選びに四苦八苦しながらも、なんとか上下3セットの服と下着数枚を選ぶことが出来ました。人間の穿く下着と言うのは、どうして表面積の少ない物が多いのでしょうか。

なるだけ広い面積の物を選んだので抜かりはありませんっ！…何に対しても抜かりなんでしょうか？

ノーブラで過ごす変態的な趣味は持ち合わせていないので、ブラもいくつか買いました。

「エリー。もう買ひ終わつたのか？」

「あ、レイさん。はい、数着買わせてもらつました。ありがとうございました！」

会計を済ませた後、私と同じ布袋（服の入つた）を持ったレイさんが後ろから声を掛けてきました。

会計は銅貨28枚でした。高い買い物ですが、服の質を考えれば

安い物です。

残りのお金は半分以下になつてしましましたが、思ったよりも安く済んで助かりました。

「そつちの小さい袋は何だ?」

「ソフチは

「

私の持つた二つの袋のうちの、小さい方を指さす。

「……その他諸々です」

「ブラン的な物か?」

「もうちょっと包み隠してやんわりと言つてください!」

「ちなみにサイズは?」

「三つが馬鹿つ!」

時たま紳士さが全く無くなりますね、女性に対するアリカシーを持つて頂きたいです。

まあ、今まで女性関係が無かつたので仕方ないのかもしれません

が……

ちなみに私のサイズは……内緒です。

「ははつ、すまんすまん。ほら、受け取れ」

カラカラと笑い、自分の持つた袋を私に突き出しました。

「そつち言つていた通り、一着選ばせてもうつたぞ。まあ、また見て見せてくれ」

「あーう、ありがと!ありがとうございます……」

「ホントに良い反応するな、ヒリー?」

「…………」

からかわれていました。

女生徒の関係が無かつた癖に、どうしてこんなに誇し癖があるんでしょうか。

まさか……レイさんは天性の女たらし?

このままでは私もレイさんの毒牙にやられる口が来るのでしょうか……注意は怠らなによつてしましちゃう。

「ありがとう、また来るよ」

「はい、ありがとう」それこましたレイライト様

私が脳内で何かと戦っている最中に、レイさんは店員さんに別れを告げ、店の外へと出て行ってしまいました。

「あ、待ってくださいー」

「エリー。飯を作ってくれと頼んでいたが、料理は出来るのか?」

「魔界では一人暮らしをしていたので、一応出来ますよ。だけど、あまり自信はないので、過度の期待はしないでくださいね」

「ふむ……ところで気になつたのだがな」「はい……」

店から出たレイさんが、私を振り返ります。

「エリーはいつも料理は分かるのか?」

「…………おおーー」

よく考えてみれば、まだこちらの食文化には疎いんでした。

人間界に来る前に色々と資料を見たので、料理の作り方までは行かなくても、外見くらいならばわかります。

作り方に関しては……まあ魔界での料理の応用で何とかなると思います。

でも流石に失敗して、美味しい料理をレイさんに出すわけにもいけませんので、軽い料理指南書なんかを買っておきました。

「おーいエリー、まだかー？」

レイさんのお屋敷の台所を借りて調理を進めていたところに、腹を空かしたレイさんが乱入してきました。

既に3回目なので、特に気にしません。

「もう、さっきから5分おきに来てますね。もうすぐ出来るので、広間で待っていてください……ね？」

「んん、分かった……しかし、人の作った料理と言つのは物心付いてからでは久々だからな。

精々騎士団の訓練中に、ローテーションで担当になつたむさしい男の大雑把な料理しか食つてない。

故に楽しみなんだ！」

「そ、そんなに期待しないでください。私もこちらの食材には不慣れですから……」

しかし田を期待でキラつかせているレイさんを見ていると、手は抜けません。

私が出来る限り、最高の出来にしましょう。

「でも良い匂いだぞ？」

「あー、駄目です駄目です！ 覗かないでください。」

私の傍に寄つて、フライパンの中身を覗き込もうとしたレイさんを、手に持つたお盆で押し返します。

「良じじゃないか、ちょっとくらう。」

「駄目ですー！ 途中で見られたら何を作つてるかバレちゃいますし、何より楽しみが無くなってしまいますよー。」

「う、分かった……じゃあリビング待つてるわ

「はい、直ぐにお持ちします」

仕方ない、と渋々引き返すレイさん。

とは言え、もう味付けも済ましたし、後はお皿に盛りつけるだけです。

温かい料理が冷えないように、お皿は事前にお湯に浸しておいています。

「まあ……最初にしては上出来ですかね？」

さて、持つてこましょ。

リビングに入ると、20人は座れそうな長机にレイさんが俯いていました。

それにもしても、途轍もなく広いお屋敷です。

台所からリビングまで、料理を持っているとは言え1分強掛かってしました。

「レーイさん、お待たせしました」

「おお、やつと来たか！」

私が声を掛けるとガバッと起き上がり、喜々とした視線を向けてきます。

まるで体の大きい子供です。

お盆に載せた料理を、レイさんが座る机に置きます。
温めた皿が功を制したのか、まだ料理は熱いままです。

合いびき肉を捏ねて、少し厚みのある橢円形にして、少し焦げが付くくらいまで焼き火を中まで通します。

その後に、事前に作つておいたソース（こちらも温めておきました）を焼いた肉にかけます。

つまり、私の作った料理はハンバーグと言われるものです。
流石にそれ一つでは寂しいので、幾つかの野菜を刻んだサラダと、マッシュポテトを添えておきました。

ソースには、台所の棚に入っていたお酒を少量加えたので、良いアクセントが付いてることを祈ります。

「おお、加工品じゃない！」

「作つたんですから当たり前じゃないですか」

当たり前の事に驚き、喜ぶレイさん。
やはり背の高い子供に見えます。

「食つてもいいか?！」

「はい、どうぞ。あ、でも……初めて作つたので、失敗してたらごめんなさい……」

「何を言つてるんだ、こんなに美味そうな匂いがするんだ、不味いわけないだろ? ジャあ、いただきます!」

「あ」

それ以上私が何か言つ前に、レイさんがまだ湯気の出るハンバーグに齧りつきました。

皿を閉じてムグムグと口を動かし……呑みこむ。

「…………」

「あの……美味しくなかつた、ですか?」

「いや、やっぱ美味しい……」

ボソリと呟くと、食べる」とだけに集中して口を利かなくなつてしましました。

本当に美味しそうに食べててくれたので、とても嬉しかつたです。あまり沢山食べるほうではないので、私の分もレイさんに差し上げたら、更に喜んでいただけました。

「いやあ、Hリーを屋敷に呼んで正解だつた。これから毎日こんな料理が見えるなら、これだけでも十分だ……」

「も、もう大袈裟ですよ……」

流石にここまで手放しに褒められると、少し恥ずかしいです。

「いや、でも本当に美味かつた」「じゃあ、ありがと」
「……」

「ん、部屋は俺の隣の部屋を使つてくれ。といつても結構離れてる
けどな」

「隣、ですか？」

「別に夜這いを仕掛けたりしないって、むしろ逆だろ？」「…

「私はしませんっ！」

「分かつてゐ分かつてゐ」

隣と言つことは、一階の部屋でしうか？

あれ、と言つことは私が昨日寝ていたのは……

「もしかして、昨日私が寝てた部屋は……？」

「ん？ ああ、あれが俺の部屋だ」

やはりですか、いやなんとなく分かつてましたけどね。

「男性の布団で寝るなんて……不覚です……」

「？ ともかく、あの部屋の隣だからな？ 風呂に入りたければそ
の通路を真つ直ぐ行けばいい」

「風呂ですか？」

「ああ、風呂だ」

「それは何ですか？」

私の発言に、田を丸くして『何を言つてゐんだこいつは』と田で
訴えかけてきます。

何か可笑しなことを言ったでしょうか。

「Hリー。少し聞きたいんだが、普段体を清潔に保つにはどうする？」

「浄化の炎で汚れを落とします」

「なるほど、そういうことか……良いか、風呂と言ひのはな？」

この後、講義を始めたレイさんの話を要約すると。

風呂とは、魔力に乏しかつたり魔力の無い人間には『浄化の炎』は使えないため、体の汚れを落とすためにお湯で体を清める、ということでした。

娯楽にも使われるらしく、少なくともグラベルでは広く普及していることです。

そう言えば、資料で読んだ記憶が……

「ともかく、入るなら好きにしてくれ。俺はそうだな……一時間後に入るから、それまでに入つてくれ」

「あ、わかりました！」

「もし入つたら、俺の選んだ服でも着てくれよ」

それだけ言い残すと、レイさんは自分の部屋へ帰つて行つてしましました。

「……取りあえず洗物ですね。

その後に、お風呂といひのに入つてみましょ」

外もとつぱり暗くなり、ようやく一日が終わりました。

悪魔、それも淫魔である私にとってはこれからが『朝』みたいな

のですが。

まあ、だから寝ないでいる必要もありませんし、お風呂に入った
う今日はゆっくり休むことにしておこう。

お賣こやの2（後書き）

と、こんな感じです。

次回はお風呂と、Hリーの服のお披露目かなあ。

ご感想やお気に入り登録してもらえたと、励みになります！
アルファポリスのランディングにも参加しているので、画面かつたら
ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5619y/>

淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

2011年11月23日12時38分発行